

◆金澤健 選

自然諷詠滑稽句、つまり「自然の情景に人間を感じ取り、自然の情景に人間事象を重ね合わせた」句を見てみましょう。この句作りの技巧やセンスに天才を如何なく発揮したのは、小林一茶ではないでしょうか。彼の有名な句を挙げると、

今来たと貌を並べる乙鳥（つばめ）かな

親分と見えて上座に鳴く蛙

春の雪遊びがてらに降りにけり

富士ばかり高みで笑う雪解かな

わが星はどこに旅寝や天の川

木々おのおの名乗り出たる木の芽かな

燕、蛙、春の雪、富士の山、星、木々どれをとっても、「こんな奴いるいる」と（その人の顔を思い浮かべ）、思わず笑ってしまう方も多いのではないのでしょうか。

自然の現象や情景の向こう側に人間を感じ取るセンスは、生来のものかもしれませんが、心がけ次第では、我々もそのセンスを磨くことが出来ると考えます。殊に、滑稽俳句作りを意識される方々にとっては、身の回りのごくありふれた自然の情景に作句のネタが豊富にあることを認識されてはどうでしょうか。

客観写生を唱える花鳥諷詠派の方々は、自然現象をありのまま詠むべし、と言われるかもしれませんが、それはその良さとして認め（意図せざる滑稽句）、自然の向こうに透けて見える人間や社会を感じ取り、それを句にする（意図する滑稽句）ことも文芸活動としとして、大いに認められるべきでしょう。勿論、一茶も、意図せざる滑稽句も作っています。

金もうけ上手な寺の牡丹かな

意図せずとも良し、意図しても良し、自然を観照し、その上でおかしみのある句を大いに作り、仲間と大いに批評し合い、おかしみを堪能し合うことこそ、俳句（俳諧）文芸の醍醐味と言えるのではないのでしょうか。

◆伊藤洋二 選 ～朝日俳壇より～

(出所：朝日新聞二〇一六年三月二十八日)

はらわたは鶉の好餌や春キャベツ 山本洗脂（下関市）

「ヒーヨ！ ヒーヨ！」と鳴く鶉は身近な野鳥、しかし、時に集団で畑に現れキャベツなどを食い荒らす、厄介者となる。春キャベツは形が丸く、葉の巻き方が緩く、柔らかく、薄く、水分が多く、甘味があり、「甘党」の彼等にとって格好のデザートである。取り残しの「腸」を喰らう、生命感溢れる句。

つれあひといへる人あり桜餅 四津三樹夫（高岡市）

筆者は辛党の団塊世代である。この句は、甘党のお話。辛党にとって「酒の後の饅頭」はあるが、その逆は無い。しかし、六腑（胃、小腸、大腸、胆、膀胱、三焦）へ沁みわたる酒も、過ぎると五臓（肝、心、脾、肺、腎）のお医者通い。今日はハンドルキーパー、辛党の休臓日。大切な人への愛情溢れる句。

鉄橋に近き父祖の田たにし鳴く 秋山和江（嬉野市）

平成二十七年十一月号からの句評には、筆者の生きた証が散ばっています。俳句は自分史を編纂するのに打って付けの文芸です。多くを語る必要は無く、十七音字に歴史が刻まれ、爾後語りかけるのです。単線の鉄橋近くの「あの田んぼ」。田の神様、ご先祖様に感謝あるのみ。感涙の特選句。

時雨忌や十七文字は無限なり 黒島輝男（桐生市）

「草の戸も住替る代ぞひなの家」から「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」までの五十余首、約九百文字。俳句の組合せは「いろは四十八文字」の十七乗…かな？ 兎に角（亀に毛）百千万劫なのだ。表向きは文字の組合せではあるが、詠むことにより無限の言霊が宿るのである。有難きかな無限の兼題句。

初蝶の光を纏ひ来たる人 早川水鳥（柏原市）

四日は「百」「千」「万」「本」を含む「いろは組」の出初式。鯨背な纏（まとい）持ちの御兄さんは、刺子頭巾に刺子長半天。その背中には「め組」の紋、

梯子乗りに見とれる町娘達。見栄を切った瞬間、一羽の蝶が宙に舞ったかに見た。初蝶は纏に包まれて年を越した「凍蝶」であった。よっ、大統領！の句。

ひと雨にリズム戻して春の川 玉手のり子（神戸市）

八木会長が創立し、指導されている「虎造節保存会」で、「お民の度胸」の演目を学んでおります。「一声、二節、三啖呵」、至高の演芸「浪曲」は、かなり難しい。車中での稽古、「不弁ながらもおおお勤めええますううう」。唸れたのだ！あと八丁が正念場。伏して頂く、感謝の句。

啓蟄や虫歯がたがたゆるみけり 大野邦洋（中津川市）

ネズミ、リス等の齧歯（げっし）類の門歯は一生伸び続けるので、ガリガリは止むを得ないとか。子年の筆者の歯は、滑舌の悪さの原因とか。久しぶりで歯医者さんに行くと驚いた。医学の進歩に感嘆。まな板の鯉に「ヴィヴァルディの春」がそっと囁いた。「老後の歯は命だよ」。ご助言に感謝の句。

春眠の妻を遮るものはなし 釋 鯛硯（飯塚市）

なんとも痛快で逆説的な安堵の時間を授かった。心の内で思うのは、「三十分の解放をありがとう」のただ一言。しかし、どうしよう。「あれ」を何処へ仕舞ったかサッパリ判らないのである。頼りの生きた「辞書」は生憎、お休み中。仕方なく所作なく過ごす。凄い人が我家には居るのだ。夫婦相和しの句。